

新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り「紅龍山(布施弁天)へ初巡拝」

集合時間場所：2012/1/22 日(日) AM8:30 JR 常磐線天王台駅北口「柴崎3号公園」集結(トイレあり)



柴崎遺跡
 徳川時代のが穴と整った墓群跡が確認されている。往古としては我孫子市白き古遺跡(古群)に比し大規模な集落であった。土器と一緒に貝殻や魚骨が出土され、五千年前は漁取の地であったことが伺われます。

柴崎3号公園は、柴崎遺跡公園とも呼ばれています。



第26番南龍寺の山門「薬医門」の構造図

薬医門は、江戸時代以降に多く見かける小ぶりな門。
 水戸城薬医門が有名で、かなり大きく安土桃山時代という。
 矢の攻撃を食い止める「矢食い(やぐい)」と言われた。
 「矢喰い」が「薬医」と文字を変えていく例は他にも多い。
 また、かつては門の脇に木戸をつけ、たとえ扉を閉めても、四六時中医者や患者が出入りできる門として使われたと伝わる。

だがこの説は、なにもこの構造でなくてはならない理由は無く疑わしい。

構造は、基本的には前方(外側)に本柱2本、後方(内側)に控柱2本で屋根を支えるが、本柱は屋根の中心ではなく、やや前方に位置し梁を支える構造で建てられています。

打始

第六十五番、青山無量院、「真言宗日照山無量院」の石柱がある。

ご本尊、不動明王 移し寺、愛媛県川之江市の由霊山三角寺
御詠歌、おそろしや三つのかども入るならば 心をまろく慈悲を念ぜよ

明治の頃までは本尊が十一面観音で「青山の十一面さん」としてご婦人方に人気があったのですが、中峠龍泉寺の門末となって以降は不動明王が本尊となっています。

入口にタブの巨木があり、樹齢200年で市の保存樹に指定されており、寛文10年(1670)建立の如意輪観音像が木の根元にある。寺の草創については不詳だが境内に正和元年(1312)の銘のある阿弥陀三尊種板碑がある。

大師堂は入口左手にあり石造りの弘法大師像と木造の弘法、興教大師像が安置されています。



対面の光音堂に沢山の「すりこぎ棒」が納められている、すりこぎで痛い所を叩くとご利益があり、願いがかなったら新しいものをお返りする、200年前からの風習が残り信じられてきた。

本堂は昭和61年の改築。平成2年12月建立になる弘法大師の1150年遠忌の供養塔がある。

また、取手の渡し場に一番近いところであり、利根川や常磐線架橋の先に取手市を見渡せる。青山八幡神社。無量院境内の南側にあり、祭神は菅田別命。かつては日天社が境内にありました。

水戸街道柴崎宿と柴崎城址

柴崎城址から柴崎神社迄、柴崎宿の家並が続く。国道6号と合流する辺りに、元旗本家給人邸の川村磯右衛門家の屋敷がある。川村邸の両隣、向え側の旧家並は、陸前浜街道(旧水戸街道)の面影がたどい、その景観は我孫子宿の跡を思わせます。更に旧街道と国道6号線合流の手前路地を南下して、旧街道から少し入ると小学校があります。この辺りを字名で「城根」といい、柴崎城址があったと言われていました。

利根川の湿地帯を望む柴崎台地の突出部に、昭和30年代末まで土塁、空掘り跡、虎口などが、東端部に昭和中期まで残り、また旧柴崎宿の街道沿い両側には、物見の櫓台跡があり、三対四郭からなる直線連郭式の戦国城郭であったそうです。柴崎城は戦国時代、高城氏の支配下にあったと言われるのですが確証はなく、天正2年(1574)頃は古河公方家の御陵所となりました。

他に、柴崎神社周辺に残る柴崎城址説もあります。

しかし、昭和40年代初めの宅地造成前までに、三郭で構成された城郭であろう、当時の様子を克明に伝える「ふるさとあびこ」により、確証としました。

著者中村脩(おさむ)湖畔情報社発行。

柴崎村たい「女松ヶ丘駈入」のこと

江戸時代の女性からの離縁が、如何に大変であったか、という古文書の内容です。

川村磯右衛門は新見家知行村々の筆頭名主、しかも柴崎村三給名主中唯一の苗字帯刀名主で、幕末の旗本家給人ともなった人でした。名主の農閑余業として、文化14年(1817)酒造株を引き受けています。酒販売の最盛期には現在の我孫子市内は勿論岩井、大室、呼塚、取手、花野井など十二村に供給していました。川村磯右衛門の妹「たい」の覚は、川村正信家に残されています。波乱万丈の女の生涯が克明に綴られた、江戸時代の「覚」は珍しく貴重なのだそうです。

「松ヶ丘」とは、鎌倉の東慶寺で松ヶ丘御所寺と言われ、上州新田郡世良田(じょうしゅう につたごおり せらた)の満徳寺と共に、幕府のお墨付きの駈込寺で、縁切寺でした。全国に2ヶ寺しかありませんでした。

「たい」は天保4年(1840)に14歳で、流山の酒造商相模屋重左衛門家に嫁入りました。

この時の嫁入り衣装や家具、道具などの購入費用はばく大な金額で、江戸大丸屋、越後屋、取手の田丸屋などで百五十両も使い、振袖だけで七着も作らせています。幕府は翌年「天保改革」で倹約令を出した。

夫の弥十郎の相模屋は流山の酒蔵でした、流山は既に味醂で全国に知られており「万丈」の堀切紋次郎や俳人小林一茶と親しかった「天晴」の秋元三左衛門(双樹)等の名は、「万丈ミリン」や「双樹庵と一茶」で、現在でもよく知られている流山の名品名所処です。寿永2年(1849)6月、夫 弥十郎に事が起きます。女性関係ではないかと推論されています。同年9月、たいは松ヶ丘に駈入り。磯右衛門から重左衛門に離縁状を請願するが、弥十郎と面談できず。

翌年十月、離縁状が届き再縁の可能性を含めた条件で離婚が成立しました。

たいは、寿永5年(1852)、布施の七郎兵衛の後妻となり生涯を共にすごしました。

江戸時代の離縁状である「三行半(みくだりはん)」は、女からは下せませんでした。又「たい」は、駈込み直後に離縁状の要求を始めていますが、駈込後27日間は御所寺で修行者として謹慎しなければならなかったようで、寺から許可が出ないと、女からの離縁状要求はできなかつたようです。

更に、婚姻に於いても家と家との結縁であり、女側の家主か兄弟が、夫側の家主を通して本人から離縁状を得なければならず、誠にやっかいでした。それ程、女性は虐げられていたようです。

第五十五番、柴崎の羽黒山円福寺、真言宗豊山派。

ご本尊、阿弥陀如来と観音菩薩、勢至菩薩の脇侍、移し寺、愛媛県今治市の別宮山南光坊

御詠歌、このところ三島に夢のさめぬれば 別宮とてもおなじすいじやく

(すいじゃく【仏教語】、仏や菩薩が衆生(しゅじょう)を救うために、仮に神や人間の姿となって現れる事)

開山は江戸時代初期、開山開基とも不詳だが、柴崎宿は渡し船の時代迄青山と共に最も栄えた所でした、以前は村の鎮守、羽黒妙見社の別当寺であったようです。昭和 61 年本堂の改築とともに、本尊の阿弥陀三尊像も補修されました。大師堂の隣に平成 2 年建立の四国八十八ヶ所巡拝記念塔があり、大師堂前の足元に赤御影石の四国を象った敷石があります。

五鈷杵(ごこしよ)をお持ちの木造の大師像は 2 体あり、隣に鯖大師堂、その隣に火炎を背にした不動明王堂ある。

鯖大師

我孫子市に鯖大師がある由縁は「なま街道と布佐河岸」による、なま街道は鉄道が引かれる以前に、鹿島灘や那珂湊から銚子を経て利根川を上り、布佐にて荷馬に積替え手賀沼北路の陸路を松戸の江戸川に運び、再び船に積替え江戸橋の魚河岸市場への街道をいうが、都会と地方を結ぶ経済効果の役割を担っていた。

相馬霊場の役割は、江戸の店は買付に取手や布佐に訪れ「店」の名を残し、寄付をするようになり、相馬霊場巡りを兼ねて人々を呼び地方都市として繁栄する。繁栄のために建立されたのが円福寺の鯖大師なのです。

四国 88 ヶ所徳島県の JR 牟岐線(むぎせん、室戸シーサイドライン)さばせ駅近隣に、四国番外霊場 4 番である「鯖大師本坊の八坂寺」があります。御本尊は弘法大師(775~835)です。

鯖大師伝説を 2 つ紹介します。

大師さま四国霊場お開きの時、難所八坂八浜の真中、行基菩薩お手植の松の下で野宿され行基菩薩の夢を見る。

当所は土佐浜街道にて、お大師さま土佐よりの馬子に積荷の塩鯖のお接待を乞う。

馬子、お接待をせず、罵り立ち去る。

お大師さま「大阪や八坂さか中、鯖ひとつ大師にくれで馬のはら病と詠まれると馬にわかになれ病む。

馬子、馬曳坂で思案にくれる。

馬子、先程の憎がお大師さまなることを知り俄悔(ごんげ)、お大師さまに塩鯖一匹を献ず。

お大師様馬子の懺悔をあわれみ、お加持(かじ)水を作り馬子、お加持水を馬に飲ます。

お大師さま「大師にくれて馬のはらやむと詠まれると、馬の病気たちどころに治る馬子、馬の病気が治ったお礼をいい、己を俄悔し、お大師さまを礼拝する。(加持：心やさしく触れてやり安らぎを与える行為)

お大師さまは馬子を大砂の浜、法生島に連れて行き、塩鯖を海に投げお加持すると塩鯖は生き返って泳ぐ。

馬子、この霊験に発心、お大師さまの教えを受け、この地に庵を作り、ひとを助け鯖大師の霊験を今に伝える。

行基菩薩による説、(668~749)

行基が四国を巡錫している時にこの地を訪れた際、鯖を馬に背負わせた馬追が通りがかった。

行基が鯖を所望したところ、馬追はこれを断った。

行基はこれに対し「大坂や八坂坂中鯖ひとつ 行基にくれで馬の腹や(病)む」と歌を詠んだ。

すると、馬は急に腹痛で動かなくなった。困った馬追は行基に鯖を差し出した。

行基は今度は「大坂や八坂坂中鯖ひとつ 行基にくれで馬の腹や(止)む」と、

「くれで」を「くれて」と 1 文字変えて詠むだけで、馬の苦しみは治まった。

円福寺と台頭

文化 13 年(1816)初代川村磯右衛門は、円福寺檀中惣代であり、当寺では重要な旦那でした。

円福寺は、真言宗豊山派で奈良の長谷寺の末になりますが、江戸時代の頃は、江戸四ヶ寺蝕頭の本所弥勒寺(下総国の蝕頭(ふでかしら))に属し、中峠の龍泉寺が直蝕頭(じかふれかしら)寺となっていました。

円福寺の台頭として、初代磯右衛門は、下ヶ戸西音寺、大岩田法泉寺、桑原光明寺と共に月番の願書を、流山の東福寺の添簡とともに提出請願しています。月番は、奉行や各寺間の連絡業務を行う制度です。月番の組頭になることは、労力による報酬によって、村の財源になるために、檀家が努力しました。組頭名主がいる寺自身も、格上げされました。

我孫子市史研究第八号 小平久 より

柴崎神社

かつては妙見社、北星神社と呼ばれ、明治 43 年から柴崎神社となった。天御中主命外六柱が合祀されている。

神域は広く整備されており、参道奥には社殿を守る一對の亀の石像、正面の扉には九曜星の紋がある。

新設の手水舎と三峰神社の別殿がある。日本武尊、平将門、相馬重胤、荒木三河守等との関わりが伝えられている。

とくに平将門と叔父の良文が平国香と戦い、良文がまさに討たれようとした時、童形の妙見菩薩が現れ、敵の上に剣の雨を降らし救われたと言い伝えられており、それ以来、一族及び後裔の千葉氏、相馬氏の守り神となって、妙見社や妙見神社と呼ばれている。妙見菩薩は北極星、北斗七星を神格化したもの、亀は菩薩の乗る聖なる生き物である。中国では道教の神で、星を見て位置を確かめた遊牧民に信仰された。

境内には市内最古の板碑、永仁 6 年(1298)が発見されている。また、左手の塚の上に「日露戦役黒髪塚」という記念碑があり、大井いち他 10 名の女性達が夫の武運長久を祈って黒髪を手向けたといわれている。

第七十五番、柴崎の青龍山医王院東源寺、

ご本尊、薬師如来 **移し寺**、香川県善通寺市の五岳山善通寺。弘法大師空海の生誕地

御詠歌、われ住まば 世も消えはてじ善通寺 深き誓いの法のともしび

天文 9 年(1540)小田原城主北条氏康が守護仏であった薬師如来を本尊として開基した曹洞宗の寺です。

天然記念物指定の真榿(まがや)の大樹(樹齢 250 年)がある、榿(カヤ)はイチイ科の常緑喬木で古くは丸木舟や仏像の素材として使われ、今は碁盤の材料に使われている。またその実は当時、子供の虫下しの薬として使われた。相馬霊場開基の光音禅師のお手植えと伝えられている。

外に楠、樺もある、東源寺は風光が弘法大師生誕地の屏風ヶ浦の善通寺に似ているところから 75 番が移されました。新四国相馬霊場はここを起点に左右どちらから回っても中間里程にあり、同じということから「中回向所(なかえこうどころ)」と定められました。

大師堂には光音禅師の位牌が祀られており、光音生誕の地である長野県海尻町ゆかりの方が取手を訪れた昭和 59 年には、ここ東源寺と取手の長禅寺、琴平神社を巡られました。光音禅師お気に入りの寺であったようです。

あちらこちらで見かける、光音講は禅師の死後一族が中心となり海尻で組織されました。長禅寺下の伊勢屋に宿泊して巡拝結願(けちがん)後は、成田不動から船橋経由で江戸に立ち寄り南牧の海尻へ戻ったそうです。

平成元年完成の今の大師堂は大きく天井には杉の根が使われており「ボケ封じ」の御利益があると言う。

境内には慈母観音像、多数の石仏・石碑、六地藏がある。

電力中央研究所、ここは我孫子左衛門但馬守の我孫子城があったといわれているが、詳細は不明。

研究所北敷地に内には、桜の老木が数十本あり、桜の開花時期には一般公開される場合がある。

柴崎様の所在地、柴崎 984

東源寺の山門前 10m程先に墓地があります。

川村姓が多く、大井宅は少ない。

柴崎天満宮の所在地、柴崎 881

国道 6 号と県道船取線が合流する、利根川田中遊水地側に社があります。

国道向側には石尊社があるが天満宮との関連は不明です。



柴崎様、柴崎 984

柴崎様とは将門の重臣柴崎左馬督(さまのかみ)のことで、その墓所が柴崎村の集落の中央部に残されている。村人たちはこの墓所を柴崎様と敬愛の念をこめて呼びならわしている。

瓦ぶきの屋根をもつ小さい建物の中に塚(宝篋印塔)があり、花が供えられている。

また位碑が立っており、「天慶二年九月十七日 真相院殿地源庭芳大居士」の法名が書かれている。

柴崎左馬督は柴崎神社の社殿を修築したともいう。左馬督はここで首を切られたとの伝説がある。

なぜ、誰に切られたかなど、それ以上詳しくは不明。天慶二年(932)は将門が一族と合戦に及ぶ三年も前であり、なぜ殺されたかについては、大いに疑問の残るところである。

いずれにしても、千年以上このように丁重に守り継がれていることを、おろそかに考えることはできない。

柴崎天満宮、柴崎 881

大井天満宮、また天満宮ともいう。国道沿いの台地の端に立っている。

天満宮を所有する大井家は、将門の重臣久寺豊後(取手市新取手大山の大山城主)の弟で、将門戦死の後しばらくしてここ柴崎に住み、農を営んだ。

大井家で「祝鎮座千五拾年記念柴崎天満宮 平成三年正月 大井氏」の文字と梅の紋所を染め抜いた手拭をいただいた。これを見てよく考えると、平成三年(1991)の1050年前は941年、これは天慶四年すなわち将門が戦死した翌年にあたる。

これは何を意味するか。将門戦死の翌年は、将門の一周忌にあたる。

恐らく将門の残党狩りがまだきびしく行われていたであろう。そんな中でも将門を敬愛する大井氏の一族は、ひそかに一周忌を取り行ったであろう。

そして将門を神としてまつために、将門が尊崇した菅原道真公を天満宮に祀ったのではないか。

神社名は天満宮だが、社前に毎年立てる幟(のぼり)には「須賀原大神」と書かれている。

天神様として菅原道真公を祀ることにより、実は将門公を祀りついで来たということができよう。

この天満宮はなぜか首天神とも呼ばれ、大井家では「正月の供え餅が首に見えるから」として、今でも供え餅は作らない。

幟は大井家の分家八軒が二軒ずつ交代で、四年に一度当番が立てることになっている。

例年一月廿五日ころ社殿を開き、女性が接待することになっており、神酒を参詣の人に注ぎ、祭礼が行われる。

平成三年には幟二本が新調され、我孫子市高野山(こうのやま)の松園琉紅氏の筆で文字が書かれた。

境内の梅の木の横に立てられる。年によって雪の降る日にあたったこともあるとのこと。

また年によって梅の一輪の花が見られるかも知れず、何とも古い日本の美しいひとこまを見る思いがする。

「楽しい東葛伝説民話事典」より

第八十四番、明王山宝蔵寺、真言宗豊山派 WC

ご本尊、延命地藏菩薩。**移し寺**、香川県高松市の南面山屋島寺

御詠歌、あずさ弓屋島の宮にもうでつつ いのりをかけていさむものふ

寺伝によると宝蔵寺は元和三年(1617)の創建であり元は地藏堂でした。

宝蔵寺は久寺家城跡の一面で城主は久寺家儀元といわれるが詳しいことは不明ですが、戦国時代には小金井城の高城氏(千葉氏家臣)配下で我孫子城主、我孫子左衛門但馬守に属していたと言われていました。

鐘楼の隣に籠堂(こもり堂)その奥に大師堂があります。籠堂ではかつては念仏講が営まれていました、2005年の巡る会のお遍路では、御詠歌の譜面が飾られていました。

豊後丹後屋敷、久寺家

(茨城県取手市新取手と千葉県我孫子市久寺家の関係について)

観覚光音禪師は、久寺家の丘は香川県の屋島に似ていると言われ八十四番を宝蔵寺に写しました。

豊後丹後屋敷は、将門の重臣の住んだ屋敷で所在は不明。取手市新取手大山にあった大山城主久寺豊後とその弟丹後は、将門の戦死を聞くや、急いで大山の砦(現在跡地は住居)を離れ久寺家に逃れた。

当時の久寺家は人の住まぬ荒れ山で狐や狸がいたかも知れない。また舌状台地の先で、西方を除けば周囲は低湿地に囲まれ、容易には人が近づけぬ土地であったと思われる。

こんな土地柄だから、将門を討った後の残党狩がきびしい中で、久寺兄弟はかくれることができたのであろう。久寺さんの家、久寺家のあるところから、久寺家という地名になったようだ。

弟丹後は野武士となり往来の旅人に追剥(おいはぎ)をしたという。恐らく生活のための苦しまぎれの所業ではなかったか。でも丹後はすぐに悔い改め、農業を営んで生計を立てたという。

久寺家兄弟のうち、兄の子孫は大炊(おおい)氏を名乗り、住居の乾(北西)の地に鷲神社(おおとり神社と呼ぶところが多いが、ここはわし神社と呼ばれている)をまつて先祖を合祀した。

現に今大炊家の近くに鷲神社が鎮座している。大炊氏は代々名主を勤めて今日に至っている。

弟丹後は柴崎村に住み、大井氏を名乗って今日に至っている。

我孫子市久寺家の大炊家には、将門に関する天慶三年(940)の位牌と遺物頸(くびき)天神があると伝わる。

「頸(くびき)」は喉(のど)に当たる、頸という漢字は、鶏の長い首を連想しがちだが、この字には「陰根」じみた根の深い淫靡な伝説を通して、現代でも通じる人生の陰陽の繰り返しを意味しているという。

新取手の大山城跡地居住の主は「風と雲と虹と」のNHKの当時の取材話をしてくれました、大山にも将門井戸があり今でも門松は飾らないとか鯉のぼりは立てないとかの風習が残っているといいます。

第八十五番、土谷津の飛龍山圓性寺(空寺)、真言宗豊山派。江戸時代は流山の西円寺の門徒でした。

ご本尊、不動明王。圓性寺は無住の為、布施弁天東海寺住職が兼務されている。移し寺、香川県五剣山八栗寺。

御詠歌、ぼんのうを胸の智火(ちか、護摩火)にて八栗をば 修行者ならでたれかしるべき

本堂裏手の小山に清水観音の祠、右に妙見様の祠がある。その下に六地藏が並んでいる。

寺の裏手の道路沿いには土谷津の豪農の家が並ぶ。取手にも「ヤチダ」というかつての湿田を呼ぶ場所が多いが、谷津(ヤツ・ヤチ)とは入り江で谷の底の部分と言い、かつて水利の悪い時代に谷津は水田の条件に適していて利用されました。

地名の土谷津とは、「土」と言う字は「十」と「一」を重ねたもので、この地に十一の谷津があったので「土谷津」と云われるようになり地名となりました。

円性寺の住居は千葉県柏市布施 2278 ですが、道路向かい側左側の一画は千葉県我孫子市布施 2344 になります、更に我孫子市布施の先の住居は、柏市布施となり土谷津の地区住所は布施という地名が、柏市と我孫子市に複雑に織重なっています、居住家一軒毎に我孫子市と柏市に分裂している実状が土谷津です。

境内には、雪月庵嘯花(せつげつあん しょうか) こと「ろうそく屋彦兵衛」句碑があります。

「 老い桜 ハイカー来たりて 散らす華 」華やかな布施弁天の櫻に比べて、円性寺境内の櫻は、老木でひっそりとたたずんでいる、私達が来るのを知っていたのか老木は桜の花弁を散らして迎えてくれました。

富勢(とみせ)と布施

柏市では布施河岸の歴史は古く渡し場は平安時代からありました。柏という地名の発祥においても柏市の北に位置する布施の河岸場(かしば)からと言う説もあるが定かではありません。実状は以下の通りです。

国鉄柏駅が誕生した頃は、現在の東武野田線の豊四季から柏駅にかけて民家の少ない柏の木が多い丘陵地でした、その丘陵地は柏の葉のような地形で豊四季を中心に十余二から根戸迄の広範囲に丘陵が点在していた。

柏の地名の歴史は、慶応2年(1866)人口数百人の小さな村落で「柏村の長全寺」という寺名と地名の記載がありました、今も毎年行われている、送り大師の東葛印旛霊場大師講(鎌ヶ谷市郷土資料館)の文中にあります。

明治22年、柏村は戸張村・篠籠田村・松ヶ崎村・高田村等と合併して千代田村となります。

明治29年、常磐線の開通に伴い「柏」駅として開業をはじめます。柏の葉なのか柏村から柏駅としたのかはハッキリしませんが、当時の地名である「千代田」という駅名にはしなかったようです。

その後、大正15年、柏駅前の発展により千代田町は柏町へ改名されました、昭和29年9月、柏町は土村・

田中村・小金町と合併して市制を施行し東葛市となりましたが小金町を松戸に編入して3ヶ月後に東葛市は柏市に改名されました。柏市は昭和40年代から急発展し、現在では常磐線沿線最大の市となり「北の渋谷」と云われる程までに急高度成長しました。

富勢は、富勢小学校など公共施設に名が残っていますが、消え去ってしまった地名が富勢(とみせ)です。

富勢には、流山から布施弁天、戸頭、守谷、谷田部を經由して土浦へ通じる平安時代以前からの古い街道が通り、利根川で渡る「七里ヶ渡し」があり宿場として栄えました、今でもこの街道筋には「富勢商店街」と名称だけが残っています、明治時代の町村合併によって名付けられた富勢は昭和29年に布施になりました。

富勢という漢字の読みですが、富勢は「ふせ」とも読めます、事実、ふせ村と呼ばれていました。

布施の地名は、布施村は古代からの下総から常陸へ出る官道の要に当り、平安時代初期、布施屋が設けられ村名となったと言います、格式を誇り村民の財力もありました。

布施屋とは奈良・平安時代に僧侶の慈善事業によって営まれた宿泊所で旅行や運搬者の無料の宿坊でした。

【参考資料】行基と最澄より行基の活動「**昆陽(こんよう)布施屋**」について。

行基年譜に布施屋というものが出てまいります。布施屋というのは、これは申すまでもないことだと思いますが、いろんな人々にもものを施す、布施ということばの「布」は布ですから、本来は布を与えることだったのでしょう。布施屋というのは、貧しい人に、あるいは生活に困っている人々にいろんなものを、まあ布もあるでしょうし、食べるものがない人には食べるもの。みなさんの合力でもって集めて施しをする。これを行基さんは奈良時代におやりになりました。その場所が布施屋であり布施屋の起源なのです。行基は全国に布施屋を広めました、和歌山市の布施屋は「ほしや」と呼び、渡し場がありました。

第六十八番、布施弁天、紅竜山松光院東海寺。WC

ご本尊、弁財天と聖観世音菩薩。**移し寺**、香川県観音寺市の七宝山神恵(じんね)院。

御詠歌、笛の音も松吹く風も琴ひくも 歌うも舞うも法のこえごえ

本堂は亀甲山(かめのこうさん)にあり、御前立ちの弁財天は八臂弁天と呼ばれ、8本の手にはいろいろな道具を持って祀られている。

本堂の造りの特徴として、密教の原理に従い内陣と外陣を分けた構造として、外陣の天井には狩野探月の龍の図、内陣の天井には本堂の建設に協力した98藩の大名の家紋が画かれています。

奥の厨司の中の弁財天は巳年にのみ開帳されます。

寺伝によると、平城天皇の御代大同二年(807)七月七日、紅竜が現われ一夜にして島をつくったが、夜な夜な島の一角から光を発するので里人怪しみ恐れ祠を建て祀った。弘仁十四年(823)、弘法大師巡錫の折、靈威を感じ、伽藍を建立し、嵯峨天皇の勅願を請い山号寺名を定めたといわれています。

八臂弁財天坐像、布施弁天の弁財天は60年に一度の御開帳であり、平素は御前立を拝むこととなります。

読み：「はっぴ(肩の意味) べんざいてん ざぞう」

弁財天の原語は「サラスヴァティー」、聖なる河を表わすサンスクリット語であり、元来、古代インドの河神であるが、河の流れる音からの連想により音楽神とされ、福德神、学芸神など幅広い性格を有しているといえます。像容は八臂像と二臂像の2つに大別される。

八臂像は『金光明最勝王経』「大弁才天女品(ほん)」所説によるもので、8本の手には弓、矢、矛(ほこ)、鉄輪、羅索(けんさく、縄)などを持ち、次のような功德があります。

一、知恵が付く 二、財福を得る 三、名声を得る 四、病気を除く 五、邪悪を排す 六、豊かな物心を持つ 七、思いやる心を育てる 八、幸せをつかむことが出来る。



一方、琵琶を奏する形の像は、密教で用いる両界曼荼羅のうちの胎藏曼荼羅中にその姿を見せている。写真
真は、板橋区安養院の八臂弁財天坐像で、布施弁財天の像に近い姿をしています。

ただし、胎藏曼荼羅中に見える同像は、後世に日本で広く信仰された女神像ではなく、菩薩形の像であり、
仏教においては、妙音菩薩(みょうおんぼさつ)と同一視されることがある。

江の島弁財天(日本三大弁財天とする説もある)、不忍池(浅草)、布施弁財天を関東三大弁財天といいます。

日本三大弁財天は、琵琶湖竹生島の宝厳寺、広島県宮島の大願寺、奈良県天川村の天河大弁財天社。

紅龍の伝説

平将門は良持と紅竜との間に生まれた子という伝説があります。紅竜はこの地の岩窟に住んでいたそうです、
紅竜は龍であって人の姿はかりそめでした、将門は布施弁財天に必勝祈願をしたが承平年間の兵乱の際に将門
によって東海寺を焼いてしまいました。後に源経基が再興したと伝わっています。

史実を探ると、江戸時代に布施村の名主を勤めていた後藤家にのこされた文書には、延宝二年(1674)布施村の
又右衛門が村人を集め、亀の甲山に藁葺き小社を造り、弁財天を祀るとあります。

今も弁財天様のある丘は、亀の甲の形をしています。延宝七年の「御林法度帳」に「亀甲山(かめのこうざん)」
の名が出ています。当時は、今の伽藍のような堂塔等がかね備わったものでなく小さな祠があっただけで、これ
を信仰しお参りするの、弁財天様近くの寺山地区だけのようでした。

元禄 12 年(1699)、布施村古谷にあった、東海寺から留守居が派遣され、管理にあたっていました。宝永二
年(1705)には東海寺が亀甲山に移転し、以後、布施弁財天と東海寺は一体となって寺運展開の歩みをするこ
になるのですが、このころ本堂建立の計画が生れ、宝永六年にはじめて江戸出開帳を行って資金の調達を得、不足
分は村人の入草金の寄進などをあて享保元年(1716)田舎には稀な本堂が建立されました。

楼門、「最勝閣」文化 7 年(1810)の創建で総ケヤキ入母屋造り瓦葺。従来のアーチ型無柱から二柱を立て通用部
分を三分しました、これは勅願所であったので正使と副使の通路を分けたもの。布施の大工の棟梁藤十郎の作
といわれています。2 階の内部中央には須弥壇を設け釈迦如来を祀っています。

鐘楼、「からくり伊賀」と呼ばれた谷田部の飯塚伊賀七の作。総ヒノキ入母屋造りの多宝塔で八角形の石積基壇
の上に円形の十二柱を立て十二支を彫刻して方位を表しています。伊賀七が残した和時計などを展示している谷
田部郷土資料館がつくば市の旧谷田部町にあります。飯塚伊賀七 (1762-1836)。

大師堂は本堂後ろにある。境内にはこのほか大日如来堂、聖天堂、虚空蔵菩薩堂、愛染明王堂等があります。

誤伝:松尾芭蕉の句は宗舞の句であり、柏市教育委員会は訂正しています。

「 涼しさや 眞帆に眞向の 山なれば 宗舞」 大谷若水筆 柏市布施 真言宗東海寺の境内。

宗舞の「舞」を「房」と読み、芭蕉の俳名初号「宗房」と読み誤り芭蕉句碑として誤伝してきたもの。1979 年に井上脩之介氏が「房総の芭蕉
句碑(下総篇)」(崙書房)で指摘しております。更に、柏市教育委員会が 1999 年 3 月に発行した「柏の金石文(Ⅱ)」の文学碑の項では、この
句碑を取り上げてはいるものの、「作者名」を記載せず、後に正式に芭蕉の句を宗舞の句に訂正しました。

芭蕉は布佐では鹿嶋詣で半泊しているが、布施弁財天に訪れた記録は無い。 以上、相馬霊場 HP へ柏市の I 様よりのメールです。

「 玉つはき ひるもふてけり 布せこもり 」 宝井其角(たからい きかく)

江戸堀江町で、近江国膳所藩御殿医竹下東順の長男として生まれた。延宝年間(1673~1681 年)の初めの頃、父親の紹介で松尾芭蕉の
門に入り俳諧を学ぶ。はじめ、母方の榎本姓を名乗っていたが、のち自ら宝井と改める。

「 闇に寝た 眼をあげばのの さくらかな 」 松暁庵朱明の俳号麦秋

小林一茶の俳友で土谷津に居住していた雪月庵嘯花(せつげつあん しょうか)の師である。

碑の裏面に記されているように、当地の領主で隠居した本多伯耆守正温公自ら、文化十二年六月に書かれたものであることから、麦秋は
田中藩および領主とかなりの関係があったとみられる。本多正温公は明和三年(1766)駿州田中藩、藩主本多正供の長男として生まれ、十二
歳で遺領を継いだ。天明二年伯耆守に叙せられた。寛政十二年七月田中騒動(詳細不明)の責任を負って致仕、三十五歳で隠居し天保九
年閏四月七三才で亡くなっている。

第六十七番、布施の薬師堂。

ご本尊、薬師如来と大日如来。大日堂と堂脇に文化4年(1807)の相馬霊場石柱があります。

移し寺、香川県の小松尾山大興寺。**御詠歌**、うえおきし小松尾寺を眺むれば のりのおしえの風ぞふきぬる

薬師堂は、水生植物園近くの「寺山ふれあい会館」にあったのですが、七里ヶ渡しの水難による救済介抱介護のために、大日堂が既にあった最も近い当地へ移築したものです。

白花たんぽぽ、

薬師堂の境内始め利根川の土手にかけて、この辺りには自家受粉では花が付かないと云う日本古来種の白花たんぽぽ(別名関東たんぽぽ)があり、桜の開花時期だけ花を見ることが出来ます。

この蒲公英は風によって数百メートルも群生位置を移動することがあり、近在では佐倉市の佐倉城に群生しており、四国と瀬戸内の島々にも群生地があります。2005年4月には戸頭地区で数本見かけられました。

「春の草 白い蒲公英 知らぬ我(われ)」白花たんぽぽを知っている人がどれほど居るか、日本の自然財産が西洋のタンポポによって消えようとしていることは事実です。

あけぼの山公園、この辺りには柏市のあけぼの山農業公園、ふるさと農園、郷土資料館などがあります。

米蒔くも 罪ぞよ鶏が 蹴合うぞよ 一茶 読み：こめまくも つみぞよとりが けあうぞよ

俳人小林一茶は、守谷の西林寺からの帰路、文化9年(1812)正月から暮にかけて下総や信濃を遍歴した途中で布施弁天に度々訪れています。

一茶の句集「株番(かぶらばん)」に次の文があります、「布施東海寺に詣でたら、鶏たちがあとを追ってくる。それが不憫(ふびん)で、門前の家に寄って米一合を買いましてやると、あちこちで仲間喧嘩を始めた。

その間に鳩や雀がやってきて、心静かに米をついばむ。鶏たちがえさ場にきたら、鳩も雀もすばやく梢に逃げ去った。鳩や雀は鶏たちの喧嘩が長く続けと思っているだろう。

士農工商その他の生業があるが、みなこのようなもの 【注釈】意識文としました。

享和句録の中に、「嘯花、布施、ろうそく屋彦兵衛」という人名があります、

俳号を**雪月庵嘯花**(せつげつあん しょうか)といわれ、小林一茶の俳友でした。

土谷津の中尾富久造宅で酒造りの経理等の仕事をしていた平弥は分家して彦兵衛と名のりました、この人物が俳人ろうそく屋彦兵衛でした。

第二十六番、富勢荒屋敷の竹林山文殊院南龍寺、浄土宗。打止

ご本尊、大日如来。**移し寺**、高知県室戸市の龍頭山金剛頂寺。

御詠歌、往生に望みをかくる極楽は 月のかたむく西寺の空

大師堂はもとは観音堂でした。また阿弥陀堂がある。元和元年(1615)寂蓮社尊誉霊哲上人による開山。元禄12年の後藤家文書によれば正保4年(1647)の創建で寛文9年(1669)にここに移るとある、移転元は不明です。

境内は広く寺子屋が経営されていたが、明治5年に学制が施行され各地に小学校が設けられたるに到り、明治6年南龍寺に「天真学校」が、根戸東陽寺に根戸小学校が開校された。翌年天真学校は布施小学校と改称され、明治33年両校は合併して富勢尋常小学校となりました。

南龍寺の門を薬医門と言う、江戸時代以降の寺門は質素な建築様式が多い。

諏訪道、流山～豊四季～松ヶ崎～宿連寺～布施～守谷間の古道。

富勢商店街通りは、諏訪道に沿って南龍寺より右脇小道を富勢西小学校方面に進みます、更に県道7号を横切り須賀神社、宿連寺湧水、松崎へ、豊四季の諏訪宮が諏訪道の発祥となった神宮です、更に流山へと歩み、江戸川端の「やっからの渡し」で諏訪道は終わります、俳人一茶も秋元双樹宅で安息しました。

この諏訪道こそ奈良の都に通じた旧東海道と共に下総の古道でした。旧東海道は、鎌倉～市川～我孫子～湖北～布佐～竜ヶ崎を経ていたようで、街道としての規模は大きいのですが、歴史は「諏訪道」を残し「旧東海道」は、その残骸だけを残して消え去りました。

解散後のバス停留所と発時刻：

JR 我孫子駅北口行は、坂東バスが運行しています。「あけぼの山農業公園入口」始発です、経路違いがあるが全て我孫子駅北口行です。**時間／4本有りお勧め**、カード乗車可能です。**KEIHOKU 前停留所**が分かりやすい。乗車時間は約15分～20分です。

JR 北柏駅、柏駅行は、東武バスが運行。

布施弁天始発と三井団地始発（両線共本数の極少）の2ルート有り、カード利用可能です。

布施発は弁天下が始発となっております。

布施発：12:58 13:55 14:42 15:42

三井団地発：13:21 14:15。

尚、新大利根橋経由で戸頭へは徒歩 40 分要です。

新四国相馬霊場 88ヶ所を巡る会、
2012年1月22日資料

